



天才とその理 解



たれ

きっと私は誤解している。それは自分でも少しは気付いている。しかしそう誤解している自分が少し好きだったりするから困ったものである。

きっかけは推理小説だということだった。その手の小説が好きな私が友人から薦められて読んだのが、森博嗣氏の「すべてがFになる」である。小説そのものもとても好んで面白かったのだけれど、それ以上に影響を受けたのが、登場する天才博士であり、その天才の生き方であった。天才というものに惹かれ、森博嗣氏のそのシリーズはもちろん、著作を全て読むようにさえなった。

その中で最も私に影響を与えたのは、「天才は周りに理解を求めないものだ」という言葉である。これを私は誤解して受け止めてしまったらしい。簡単に説明すると、そういえば昔、数学で必要条件と十分条件というものを習ったけれど、天才と理解に関して、それが必要条件なのか十分条件なのかを間違えたということである。すなわち、「天才とは周りに理解を求めない」を、「天才とは周りに理解されない」と読み替えるまではよかったのだけれど、それを「周りに理解されない者が天才である」と読み替えてしまったのだ！

もともと当時から周りと違うことをしたいと思っていた私は、その言葉のバックアップを受け、ますます周りと違うことをしようとした。当時作っていたホームページでは周りに理解できない言動をしようと努力し、当時知りあった、何故か「憎い」を口癖とする友人に感銘を受けて「ニクイ」に関して研究し、また当時はやっていた「たればんだ」にも衝撃を受け、「たれ」に関する研究を行った。この「たれ」に関しては大学院生の友人と冗談でやっていた研究発表会で「たれ学講義」として発表するにまで至ったほどである。そして、周りにどんなに笑われようとも、もちろん人前では主張はしなかったけれど、心の中ではそんな自分を天才だと信じて疑わなかったのだ。

あれから十年近くが経った今、落ち着いて考えてみたら、どう考えても自分は天才ではない。あの時優越感に浸っていた「たれ学講義」だって、嘲笑を受けていただけだったのかもしれない。けれど、それでも良かったのだと私は思っている。あの言葉に背中を押されたおかげで、前向きに人と違うことを考えるようになって、ものすごく楽しかった。そして、今だって楽しい。

「すべてがFになる」。この本が私のすべてを作ってくれた、なんていうのは大げさだけれど、そんなわけで、私はこの一冊にとっても感謝しているのである。